

發葬詞

これの小床を仮の喪屋と齋い定めて暫時置き据え安め奉る故天理教△△分教会初代会長△△△△△大人の御柩の御前に慎み敬い歎かいて白さく

久方の空行く月の清き光りにも立迷う浮雲の障りあるが如く 春山に咲き乱れる花の梢にも吹き荒ぶ嵐の嘆きある如く あわれ汝大人はもかりものという世の慣い得免がれ給わずまだ心残れるこれの現世を退向になされしは悲しとも悲し口惜しきとも口惜しき限りにぞある

汝大人はや戦前二十三歳の若さで早くも○○町に店舗を構えられ 戦後はいち早く魚加工場を開設し程なく○○町商店街会長並びに○○区食品組合長等の要職に就かれしが一方 上級△△の草分けの頃の信者故△△△△△刀自の孫又故△△△△△刀自の娘たる△△△△△姉との縁から故二代会長△△△△△刀自を知る身となられたり 入信早々長女△△△若子の出直しという大節の懺悔から講社祭を月二回勤めたいと要望なされ店先に立たれし人毎に天理教のお話を取次ぎ「天理教の△△さん」と呼ばれるようになられしが自動車事故で無い命をおさづけの理を受けて奇蹟的に救からられてからは折角の店舗を心から放し ひたすらにをいがけおたすけに奔走される中遂に△△分教会設立という価値深き偉業をなし遂げられたり 再来約四十年東に病人の家を訪ねてはおさづけの理を取り次ぎ 西に家庭事情に悩む人々を訪れ親神の親心を伝えられしが 未熟な布教師のたど／＼しい歩み故何時も苦勞がちでありしが「共に暮らす家内や子供達には長い間どれ程つらい思いを与えたか知れない万感胸に迫る今日この頃だ」と後日本人は述懐されたり 教会名称の理と共に初代会長の道すがらは末代に輝くものではあるが △△分教会並びに△△分教会の道の台として現在二人の娘をお使い頂くと共に この教会の二代会長△△△氏を芯として△△の道に遺されし多くのよふぼく信者達が汝大人の心を改めて自らの心とし これからのたすけ一条の道を一手一つに押し進められむとする眞実を受けられ今は御教えの定め式のまに／＼一世の終の式儀仕え奉りて永き別れを告げ奉らくを平らけく安けく聞食し諾ひ給いて惑う事なくためらふ事なく唯一筋に親神のふところに行き奉りて抱かれ奉りて 家族親族たちを己が向々あらしめ給わず清き赤き直き心もて それ／＼の道につとめ勞き奉らしめ給ひ汝が遺骸は千代の住所と定め奉れる奥つ城所に平らかに安らかに出て立ち給ひ 汝が大人は再び新しき着物を召されていち早くこれの世に出直し給えと露けき袖の涙をはらい謹み敬いて白す